

「原本取り狂文」

局きょくの報道ほうみち

*原本「おくのほそ道」

Power will be maintained by the groovy guy(or gal) who gets the most media coverage for his sleaze. Naturally, his friends in various businesses will do okay too.

—— By Frank Zappa

己の低俗さ加減を最も多くメディアに流した俗物野郎（または俗物女郎）にこそ権力は引き続き掌握されるものなのだ。勿論、種々の業界に在籍するその仲間達も、まあどうして、巧いことやらかすのだろう。

—— フランク・ザッパ

作 (伝) 松尾破証ばしやう

校注 藤原つて云うかあゝ

天綴楼原稿

〔除省〕 *この段原本「序章」

月つき末すえは悪態あくたいの加虐くわきやくにして、行ゆきかふ処とこも又度々たびたびなり也。Nの上に生涯しやうがをうかべ旨い汁じゆとらえて負おひをむかふる物ものは、狒狒へんしゆうけんたるにして、多肥たひを栖すみかとす。保身ほしん耄碌まうろく多肥たひに失しつせるあり。抑おさもいづれの年としよりか、編集権へんしゆうけんの加勢かぜいにさそはれて、豹変ひょうへんの思おもひひやまず、改竄かいざんにすらさへ、^(一)姑息こそくの悪交渉あくかうしやうの霸奥はあくに曇くもる硝子しょうしをはらひて、やいやい調子てうしむくれ、腹立はらだてる霞かすみケ関せきの側わきに、苛顔せきがんの責せきこえんと、そぞろ上の物ものにつきて心こころをくるはせ、党組とうぐみ臣しんのまねきにあひて取とりもの手てにつかず、もの言ことばの破やぶをつづり、話わを付つけかえて、慚愧ざんきに窮きゆうするより、待まちつ居間ゐまの次つぎ先心せんしんにかかりて、進すすめる方かたは意図いどに譲ゆり、担当たんとうが別所べつしよに移うつるに、部下ぶげなども入替いれかる夜よぞNの為政ゐせい

*本句「草くさの戸とも住替すまかる代よぢいなの家い」

表四分おもてしきぶんを言いふ通とおりのあしらひに欠置かけおく。

●この段事件概要

* (一) 欲よくの盛さかんな人の喩たとえ

* (二) 私欲しよく盛さかんで笠かさに着きて驕あること

- * (三) 時の権力の中枢
- * (四) 存在しながらその実態を曖昧にする物・仕組み
- * (五) 苛々顔して責め立てること
- * (六) Nの心を誘惑するお上の意
- * (七) 予算編成承認

〈多肥質〉 *この段原本「林立」

若いも末もないが、阿諛どもの面のうのうとして、隙がある訳にて怒りをさはれる者から、愚痴の旨流石にみえて、上の中のは尚の上、将いつかなと御苦労多し。鬱増し気掛かりは多ひよりくだい故、Nを背負ひて怒る。近習と云ゴロいてNを謀れば、前途ナンセンスの重い真似にふさがりて、目こぼしのかなたに歪の波風をそそる。

欲張や取巻上の目に慣た

*本句「行春や烏啼魚の目は泪」

是を 身立の区別として、欲道なをすすます。人々は夢中に質ならひて、苦心かけの氣ゆるまじはと、見倣ひなるべし。

- * (一) おろか。真理を解する能力のないこと
- * (二) 嘲笑的な意が込められている
- * (三) 一層・更に・一際
- * (四) ゴロツキの略
- * (五) しぐさ・動作「ふざけたーをする」
- * (六) 立身出世

〈苛顔の責〉 *この段原本「白川の関」

斯かる(前段に見られる状況・環境の)下邪気飽かず重るままに、苛顔の責にかかりて多肥心定りぬ。「以下で見よこれ」と煽求しも断れない。中にも彼責は三責を一にして、妄想の人心をとどむ。足枷を義理に起し、揉手を大鍵にして、その場残す附後あぶれ無し。首脳派尚常態に、威張を鼻に掛そひて、右記にもほゆる心地ぞする。後塵お冠

を正し移讓（三）あらための粗矯（四）きよづけし事など、毀誉附（四）おかの腕にももとめ置れしとぞ。

角（三）つのなほは尚かざしに責（四）あれぎの荒気かな 嘘等

*本句「卯の花をかざしに関の晴着かな 曾良」

●前段及びこの段癒着の内情――

*（一）元日本軍慰安婦・ジェンダー・国家並びに天皇の戦争責任

*（二）地位・権力のある人を仰ぎ見る者

*（三）自分らに都合よく物事を乗り換えさせること

*（四）毀誉褒貶の恣意的技

〈しのぐの跡〉 *この段原本「しのぶの里」

（うち）あくれば、しのぐモチ狡（二）ずるの意志（三）たすけの助で、お忍び（四）すくのさたに抄（五）まじ。先は山場例（六）こがひの子飼（七）しやへりに意趣（四）なかば半無視（五）うずもれに埋（五）うはててあり。覇党（六）ぼかしの上手（七）けどりを気取（八）こしひて拵（九）こしらへける、「暈（六）まは 拳（七）こぶしの態（八）まゝの故（九）ゆゑに喋（十）しやへりしを、オールライト（十一）まにまにの人の醜（十二）みにくさをあらはして、其意趣（十三）そのこころを 試喋（十四）こころみしやへるをにくみて、虚（十五）まじの谷（十六）やまにつき落せば、意趣（十七）おもての面下（十八）おもてさまにふしたり」と知（十九）しる。さもあるべき事にや。

捌（二十）さばいとる手もと已無（二十一）やむなししのぐ狡（二十二）ずる

*本句「早苗（二十三）せなえとる手もとや 昔（二十四）むかししのぶ摺（二十五）ずり」

●この段実行――

*（一）「勿論」を親しみを込めて略したもの

*（二）世上に漏れぬようこっそり、またそれとははっきり分からぬ風に指図されすくい取る

*（三）判決の場面、被害・加害双方の証言など

*（四）意向・意図

*（五）政権与党の重役

*（六）往時とった愚拳

〈非道い罪〉 *この段原本「平泉」

尊大（一）みえやうの見栄（二）いつせい様一斉（三）ぐちの愚痴（四）おほもんにして、大物の跡（五）ありは一時（六）*（一）してきらこなた（七）あとに有（八）てんよう。史的等（九）なりは後は転用（十）なりに成て、

シーン改竄のみか質も残す。先過まづあやまちにおごれば、ネタ絡み騒さわがん 風かぜより流るる大過たいか也。
 ゴロの側がはは何時なにかもが二兎ふたうさぎをめぐりて、過あやまちの下にて大過おちいるに落入おちいる。奴等* (四) やつらが仇敵あだかたは、ゴロの罵声ののしりを隔へだてて、暗部愚痴あんぶぐちをさし堅め、嘘うそをふせぐとみえたり。偕さても義人ぎじんすぐつて此潮このしほに興り、巧妙こうみょう一時いちじの空疎斑くうそむらとなる。「駆使破れて惨禍さんかあり、潮* (五) しほはる張はにして嘘涸うそしほみたり」と、技巧わざくちゆき行て、怒気いかでかのうつるまで 間* (六) あいだを外し侍りぬ。

先ず嘘は際物きはものどもが故のアート

*本句「夏草や兵へいどもが夢の跡」

角派手つの はでに過熱かねつさみゆる修羅場しゆらばかな 嘘等

*本句「卯の花うに兼房かねぶねみゆる白毛しろげかな 曾良」

兼かねて耳驚みみおどろしたる非道開帳* (七)す。氣きを負おふは干涉かんせつの像ようののこし、怒負いかりおふは参内* (八)の質疑しぎの納なめ、安穩あんゑんの解ほどけを感じかんじす。吉報散きちほうちりうせて、唯ただのロボット柳こがひにあはれ、子飼* (九) かしらの頭あたま更迭しんたに愚痴ぐちつて、既類すでんたい廢空はいくう虚きよの叢くさむらと成なるべきを、詭弁新あらたに託かこて、見方みかたを覆おほひ* (十)て風雨しのぐを凌しのぐ。暫時しばらく演題* (十一) えんたいの盛さかとはなれり。

場乱ばみだれの切きりのこしてや怒負いかりおふ

*本句「五月雨さみだれの降ふりのこしてや光堂」

●この段番組恣意的編集(改竄)に対する継続的批難。スクープされた実態報道。続いて職員の内告発会見。高まる批難。それに忘れた被告発側の白々しい会見。更に高まる批難

難

- * (一) 歴史的事実
- * (二) 趣・具合・体裁・状態
- * (三) 余計に
- * (四) ゴロの側
- * (五) 時機がのび広がったこと
- * (六) 関係・仲
- * (七) 当該番組元担当デスクの告発とそれに忘れた被告発側の答弁
- * (八) 永田町界限に参上すること
- * (九) 匂い
- * (十) 世論の批難
- * (十一) この問題に関する講演会やシンポジウムが盛んに執り行われたこと

〈杞憂弱志〉 *この段原本「立石寺」

嫌やな 型*(一)様かたよう に 杞憂弱志*(二) と云病手等いふ*あり。自覚大事*(三)の廃棄やみてるにして、殊静観じかくだいじの地也*(四)。
 いじけんすべきよし、人々のくすむるに寄よりて、初しよつ端際ばなぎはより挙こぞつて聞きし、其間そのかん気散るかばか
(五)り也。義(六)いまだ熟うれず。仕事しごとの忙あづかに与おき置*(七)て、参上さんじようの業わざにのぼる。言いはずいはに言いはんことを重かさねて
 然さもとし、脅迫きようはく押売おしうり、鬱積うつせき負おひて請滑うけなめらかに、現状げんじようの近因とひぢ扉とびを閉とめて、物ものの元もときこえず。意志
 を多おほぐり、上うを吐はいて、別格べつかくを拜べつかくし、邪計じやけい索漠さくばくとしてゴロのしみ行ゆくのみおぼゆ。
 何時いつからか言いはずいはにしみ入いるる声こゑ

*本句「閑しづかさや岩いわにしみ入いる蟬せみの聲こゑ」

* (一) その独特のスタイル・風習・慣習

* (二) 無用の心配をしてしまふ弱い意志

* (三) 病む人々

* (四) 立場

* (五) 物事に消極的になり、ひねくれたり物怖じしたりすること

* (六) 道理・人の守る正しい道

* (七) 上部に伺候すること

* (八) 上辺・上面

〈お上側〉 *この段原本「最上川」

お上側かみがはのらんと、報道局ほうじどうきよくと云所いふに頼たよりを持もつ。個々こごに風紀ふうき廢頹はいたいの種こぼれて、煩わづふ沙汰さたの
(五)うかつのしだい、保革ほかく一声いつせいの粗相そさうをやはらげ、此道このみちにさぐりあしきして、恩顧おんこう(亮)つた道みちに
 ふみかよふてふ 潰つぶども、みちしるべする人ひとしなければと、わりなき一質興ひとたちしぬ。この
 たびの潮流なみ、爰こゝに至いたれり。
 お上側お上側は、道奥みちのくより出いでて、嫌いやな方かたを水上みなかみとす。ごでん(親伝)・あやふやなど云おそろし
 き難情なんじよう有あり。下敷したじきアナの舌なごを流ながれ、果あまたは数多あまたの家いえに入いる。左云さいふアナ多おほひ、受身うけみの中なかにコ
 ネを下くだす。是これに金かねつみたるをや、かなコネといふならし。素人のぞみの時ときは会派あひはの隙ひま々に凝こりて、
 (擦すれつからしとなつた後は) 善人ぜんじん移動いどう(して)、議士ぎしに臨のぞみて立たつ。不み見みなきつてNあや

うし。

場乱ばみだれをあつめて流しお上側

*本句「五月雨さみだれどあつめて早し最上川」

●前段及びこの段組織内部実態――

* (一) 殺漬

* (二) 報道局の奥

* (三) 会長

* (四) アナウンサー

* (五) 打ち合わせ通りのニュース台本

* (六) 言うなり・阿諛。無論アナウンサーばかりではなく組織的なもの

* (七) 擦れっからしではない頃

〔N〕〔H〕〔K〕固持〕 *この段原本「越後路」

●この段の文、紙魚しぎ激しくて読解不能。他に複写なく録音ろくおんの存否も不明。但し、左記句のみ難より逃れ読むこと可能――

不意ふいつきや無理むりさも常の世には似ず

*本句「文月ふみづきや六日むいっかも常の夜には似ず」

笑身わらふみや顔かほによこたふ悪あくの皮かは

*本句「荒海あらいみや佐渡さつによこたふ天河あまのかは」

〔お粗末〕 *この段原本「小松」

お粗末途中とちゅうちゅう綻ほころびて

しようもなき文粗末あやむくたき向唾棄むくたき疼うづき

*本句「しほらしき名なや小松吹萩こまつはぎすすき」

世心よのこころ、唯ただの陳謝ちんせに猛まうす。種漏ねたもれはカット・気色けしきの切きなり。嘘鍵うそのかぎ、論旨ろんしに即すなはせし時、要旨ようしど
うも斯凝固こころかたまらせ構かまることから。げにも平謝ひらあやまりのものにあらず。目差まなざしより吹替ふきかにまで、何
時ときかや駆使こがひのもりもの子飼こがひをちりばめ、先頭まづかしらに髪型かみがた変かはり。種漏ねたもれ映うつしぬ後、

* (六) きそこのそし か * (七) たんじやう (終) * (八) かのねじろ
 基礎阻止の過 嘆状 みをへて、 彼根城 にごねられ 喋よし、 日にちの受容が問せ
いしやうせ し事共、まのあたり演技にみえたり。
 むざんやなカットの下を切り切りす

* 本句「むざんやな甲の下のまりぎりす」

●この段改竄疑惑と疑惑に関する要望書・申入書――

* (一) 間投助詞

* (二) 先ず第一に

* (三) 北原氏論考に詳しい

* (四) 粗製濫造、誰が見ても辻褄が合わず「変」であると疑問を呈させる編集を施した番組の放送

* (五) 二〇〇一年一月三十日放送の後

* (六) 当初の台本(基礎)の大幅な変更(阻止)

* (七) 要望書・申入書

* (八) 渋谷区神南在の本部

〈大餓鬼〉 *この段原本「大垣」

苦痛も 好 みなどで 描かへて、むのうの国へと伴ふ。(サバイバーは) 大人にたすけ
くつう * (一) いの おほがき あひ おとな
 られて(そんな) 大餓鬼の京に入ば、其処等も一斉寄来り合、N「H」K陣も車をとばせて、
* (二) じつかう いりあつま ぜんせんし ほうそうじんし そのほか(詳) * (四) (動) そしやう
 実行 が上に入集りぬ。前戦士、法曹人士、其外くはしき人々日夜とぶらひて、訴訟の
(実) かつよろこ か かへりみ * (五)
 みのりある果を説き、且悦び、且いたはりぬ。(だがそれを無視し省ぬまま) 阿鼻の物
な むしんか * (六) けんゆう
 すごさもいまだやまざるに、名が付き無心家になれば、為政の 権右 おがまんと、又N
 において、

かなぐりのむたいに浮かれ生悪ぞ

* 本句「蛤のふたみにわかれ行秋ぞ」

●この段女性国際戦犯法廷の意義とそれを無視し省みぬ輩(大餓鬼)――

* (一) 客観的真実を顧みず自分の都合に合わせ選り好みすること

* (二) 様々な地域

* (三) 女性国際戦犯法廷

* (四) さがし、調べる。調査する

* (五) 過去・現在を問わず犯した酷たらしい状態

* (六) 権力があつて地位の高い人

□藤原つて云うかあゝ奥書□

*原文「藤原定家作「明月記」治承四年九月」

N上乱脈罪問ふ危機に満つといへども、孰も治癒せず。法規正常は彼が事にあらず。陳情・奉公は退廢より起り、相思扶養・豪腕を乗ずるのみ。政情親交の明と称し、群権に洵し。或は酷使に任ずるの由、精々憑むべからず。「昵懇上乘 請より破損の遂行委と為し、当局に施行すべし」の由其の聞え有り。

三話足せば粗も擬きもわかりかね裏を問わなと悪の言う上 ー藤原つて云うかあゝ詠

*本歌「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のたま屋の秋の夕暮ー藤原定家」

その中身かえて彼努等の謀りせば悪の心はのつけから本気 ー脇腹びらびら詠

*本歌「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし 在原業平」

*尚、如上奥書は左記を原文とする。

N上乱脈雖満罪問危機孰不治癒、法規正常非彼事、陳情奉公起於退廢、乗相思扶養豪腕而已、稱政情親交之明徇群権云々、或任酷使之由、精々不可憑、昵懇上乘依請為委破損遂行可施行当局之由有其聞、

(了)